研究課題	「思いが聞ける・話せる」オーストラリアとの心の交流」
副題	～外国語科及び外国語活動を中心に，ビデオ会議で生きた英語を使うことを通して～
キーワード	ＥＳＤ・ＳＤＧｓ　　人権教育　　多文化共生　　カリキュラムマネジメント
学校/団体 名	熊本市立北部東小学校
所在地	〒８６１-５５１７　熊本県熊本市北区鶴羽田２－７－１
ホームページ	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/e/hokubuhigasies/

１．研究の背景

本校は児童数６９６人（2020.3.1 現在）の比較的規模の大きい学校である。九州の中央に位置する熊本県の中央に熊本市がある。主要国道，高速道路が通り，交通の便がよいことから人口が増えている校区である。10 年前に「外国語活動」の研究指定を受け，それ以降綿々と外国語（英語）教育を研究している。校区に居住したり，ホテルに滞在したりするなどで，外国出身者を見かけることが珍しくなくなった。グローバル化が進みつつある日本において，環境や文化等が違った国や人々を理解し，「英語」をツールとしたコミュニケーション能力を育てることは重要であると考えた。

図-１　**画面を見ながらの話合い**

熊本市では平成３０年度に「教育ＩＣＴ環境整備」として普通教室に６５インチ電子黒板及び実物投影機が１台ずつ，３教室に４０台の割合でタブレット型端末（図 - １）が導入された。ＩＣＴ機器の充実を背景に，これをチャンスととらえ，縁のあったオーストラリアの州立校と，リアルタイムのビデオ会議ができる環境が整った。

２．研究の目的

本校は，昨年から子どもたちが進学する中学校区（１中学校・３小学校）で「ESD(持続可能な開発のための教育)」の研究指定を受け次のように考えた。（図 - ２）

(1)ICT 機器活用

ICT 機器導入による教育効果を上げる。タブレット端末を介すれば，話合いや思考が深まり，学び合いが活発化するような授業を目指す。

(2)オーストラリアと交流

ビデオ会議システムを使って，リアルタイム（授業時間内）で交流を行い，(3)や(4)に示す目的に迫る。

(3)小中連携

図 - ２　研究構想図

予測が難しい未来を生きる子どもが，人種や文化等の「違い」を受け入れ，互いを理解し合い「持続可能な社会」を共に創っていく能力を中学校と連携し育てる。

(4)体験的理解

学問のうえでの多文化理解でなく,「心の交流」を通して，相手を理解し，人権を尊重し合い，感覚的に分かり合えるような授業を，カリキュラムマネジメント（教育課程の工夫）の視点から創り出す。

３．研究の経過（主なもの）

年月	取組内容	備考
3 月	オーストラリアとビデオ会議テスト接続授業	4 年 1 組，全職員
4 月	・大阪教育大学・加賀田哲也教授を招いて研修講話「英語教育は平和教育」ほか ・研究組織立ち上げ，年間計画作成	加賀田哲也教授 全職員
	・年間校内研修計画等について	全職員
	・パナソニック教育財団助成手続き	主幹教諭，研究部
5 月	・6/4 研究授業事前研修	
6 月	国際理解授業研究会 研究目的(1)(2)(4)	加賀田哲也教授 4 年 1 組，全職員 外国語専科，ALT，外国出身ゲストティーチャー
	オーストラリア接続授業研究会 研究目的(1)(2)(4)	加賀田哲也教授 5 年 3 組，全職員 外国語専科，ALT
7 月	国際理解授業研究会 研究目的(3)(4)	加賀田哲也教授 1 年 5 組，全職員
	オーストラリア接続授業研究会 研究目的(1)(2)(3)(4)	加賀田哲也教授 4 年 2 組，全職員 外国語専科，ALT
8 月	1 学期総括	全職員
9 月	研究発表会に向けて	全職員
10 月	国際理解及びオーストラリア接続研究発表会 （公開授業 2 本） 研究目的(1)(2)(3)(4)	加賀田哲也教授 6 年 2 組，3 年 2 組 外国語専科，ALT，外国出身ゲストティーチャー 全職員，学校関係者
11 月	研究総括，論文作成，報告書構想	全職員

12 月	論文作成，パナソニック教育財団報告書等作成	全職員
1 月	ICT 活用授業研究会 研究目的(1)(3)(4)	平井聡一郎元文科省 ICT 活用アドバイザー 2 年 3 組，全職員
2 月	1 年間の総括，次年度志向検討	全職員
3 月	パナソニック教育財団事務手続き 臨時休校による緊急対応のため，成果報告書修正	主幹教諭，研究部

４．代表的な実践

4 年生総合的な学習の時間　研究目的(1)(2)(4)

児童の実態	（29 人）子どもたちの保護者に東ヨーロッパ出身の方がいる。校区のリゾート型ホテルにアジア系宿泊客が増え，学校の近くで見かけることが多くなり，外国人との関わりが少しずつ増えている。
単元名	Difference is good!! ～ちがいを探そう・認め合おう～（1/2 時間）関連教科等：国語，社会，道徳，外国語活動，特別活動
目標	水環境やゴミ処理，ユニバーサルデザインについて，自国の状況と外国の様子とを比べて，「違い」を知ることができる。知り得た「違い」から，自らの生活をふり返ったり，未来のために自分にできることを考えたりすることができる。
１出会う ２知る・認める ３つながる	ゲストティーチャーによる自己紹介。本時のめあてを知る。 交流タイム。自己紹介。参考英語表現例は「Hello. I’m ～. I like ～.Nice to meet you.」 自分たちが調べたことをタブレット端末を使ってゲストティーチャーに日本語で伝える。また，ゲストティーチャーの母国の様子を，タブレット端末やパソコン画面等を通して見聞きする。 共有タイム。これまでの発表から自分の考えを持つ。ここで分からないことはゲストティーチャーに改めて質問する。 日本と諸外国の共通点，相違点どちらも大切にするよう伝えることで，片方が良いという考えにならないようにした。「みんな違って，みんないい」という受け取り方ができるようにした。 Ｃ：ロシアの水道水は，茶色と聞いて驚きました。そのまま飲むとお腹をこわすそうです。ニュージーランドは日本とあまり変わらないそうです。 Ｃ：ゲストの方々が写真や資料を準備してくださったので，分かり易かったです。あいさつが通じて嬉しかったので，またこのような交流をしてみたいです。

5 年生外国語活動　研究目的(1)(2)(3)(4)

児童の実態	（31 人）昨年度 3 月にオーストラリアとのビデオ会議接続を本校で初めて行った学年である。当時はアプリケーション及び通信環境の影響で，通信品質がよくなかったが，リアルタイムの交流を経験している。
単元名	Unit３　What do you have on Monday?（We can! 1）（1/7 時間）関連教科等：国語，道徳，特別活動，総合的な学習の時間
目標	他者に配慮しながら尋ね合い，時間割や夢について自分の考えを伝え合おうとする。
１出会う ２知る・認める ３つながる	英語の挨拶を子ども同士交わし，明るく楽しい雰囲気で授業を始める。本時のめあてを知る。 自校の時間割を伝える。We have（　　）on　Friday”“We have（　　）on　Monday”など，定型文で交流する。オーストラリアの時間割をたずねる。“What do you have on Friday in Australia?”自分の夢やオリジナルの時間割を伝える。“I want to be（　　）.“So I want to study（　　）.” ”I have（　　）on Friday. 返しの言葉を言うように声をかけたり，カードを見せたりする。“What do you want to be?” I see.＞わかりました。Sounds good.＞いいですね！Me too. ＞私も同じです。That’s cool!＞かっこいいですね！など。振り返りの観点を示し，感想を記入した。 Ｃ：オーストラリアの友達も，日本と同じような学習をしていて驚きました。でも，夢はラグビー選手や科学者と，私たちにはない夢だったので，違いもありました。 Ｃ：オーストラリアの子どもたちも同じような夢があり、嬉しかったです。画面を通して話せたので、目の前にいるようでした。

6 年生外国語活動　研究目的(1)(2)(3)(4)

児童の実態	（33 人）タブレット端末導入後 1 年が経ち，操作について随分慣れて活用できるようになっている。外国語（英語）については，既習事項を用いた簡単な挨拶，質問などができるようになっている。
単元名	What do you want to watch?　オリンピック・パラリンピック（We Can!2 Unit6）（8/8 時間）関連教科等：国語，社会，道徳，外国語活動，特別活動
目標	既習の英語表現を使って，相手意識を持ち他者に配慮しながら，オリンピック・パラリンピックで見たい競技について，積極的に尋ねたり答えたりして伝え合う。

１出会う	本校の友達同士挨拶をする。英語の歌を歌ったり，スモールトークをしたりして，楽しく授業が始める。“What do you want to watch?” B “I want to watch ~.Because I’m good at ~./I can ~. I like ~. How about you?” A “I want to watch ~.” B “Because I’m good at ~./I can ~. I like. A “OK.Thank you.
２知る・認める	(1)あいさつをする。Hello. I’m～ . Nice to meet you.(2) 自己紹介をする。I like basketball. What sport do you like? It’s nice!(3)日本について伝える。We have the Tokyo Olympic and paralympic Games in 2020. Do you.know? I tell you Japanese culture.We have ~. / You can see ~. /You can eat ~.等(4)自分たちのランキングを伝える。Our ranking is o.3, ~・・・How many did you get correctly?
３つながる	(5)オーストラリアのランキングを聞く。How about you? Why? Please come to Japan.本時の活動を振り返る。交流会で気付いたことや分かったことを伝え合う。本時の交流の感想を記録する。

５．研究の成果

グラフ（図－３）は，昨年２月と７月に子どもと職員に１０項目のアンケートを取ったものから抜粋したものである。８は「英語を学ぶ意欲」，９は「英語の活用」１０は「学びへ向かう意欲」を示したものである。どの項目も意欲，実践活用に向上が見られる。

図－３　児童アンケート（左）と職員アンケート（右）

さらに，熊本市で実施している学力調査の結果も，６年生国語と算数を例にとると，図－４のグラフのように３年間低下していた学力が向上したことが分かり，ICT 機器を外国語（英

語）に限らず活用したことの効果ととらえている。

図－４市学力調査（６年生）

学校関係者評価でも，図－５に示すように，ICT を活用しているかという問いに，平成３０年度（左）から令和元年度（右）へ保護者，職員の結果が向上した。（青及び赤が肯定的な回答を示す。）ここにはないが，学校評議員からも ICT 活用に関して高い評価を得ている。

図－５　学校関係者評価

６．今後の課題・展望

オーストラリアとの交流を始めた１年前は，現地の教職員との連絡は専ら電子メールであった。しかし，返事がすぐに返ってくるとは限らず数週間待つこともあった。そこである職員が SNS を使って連絡することを思いつき実践した。連絡が文字通りリアルタイムでできるようになり，連携が一気に深まった。今後も全職員で知恵を絞って研究を進めたい。

７．おわりに

新型肺炎流行による臨時休校措置になった。このような事態だからこそ，本研究の価値があると考える。休校期間中の子どもとの連絡・学習ツールとしてビデオ会議システムが全市的に活用されている。その先頭をパナソニック教育財団の後押しで走ってきた責任がある。今こそ，この局面を他校と手を取り合って乗り切りたい。熊本地震を乗り越えたのだから。

８．参考文献

・「ＥＳＤの学習過程を構想し展開するために必要な枠組み」国立教育政策研究所
・「学校における持続可能な発展のための教育」国立教育政策研究所